

文化情報誌

たわわ

2024 No.123

「たわわ」というタイトルには「小さな情報がたくさん集まって多くの実を結ぶように」という期待が込められています。

自分の
このころ、
おもむくままに



永野 亮比己さん

平塚で生まれ育ちました。小さい頃からテレビやディズニールンドのパレードを見て体を動かしていたようですが、ダンスとは無縁で水泳や柔道、サッカーなどを習っていました。そんな中で、小学4年生の時に、母に連れていってもらった『THE CONVOY SHOW』を見て、スイッチが入りました。渋い大人達が歌を歌ったり、ジャズダンスを踊ったり、それがカッコよく輝いて見えました。スポーツなどでは感じなかった不思議な気持ちになり、舞台・劇場という密閉された空間での臨場感やお客さんの心を掴んでいく緊張感に子供ながら鳥肌が立って、それまでの習い事とは違い、初めて自分からダンスをやってみたいと思いました。



とは言い、すぐに習うことはなく、小5で学校のダンスクラブに所属して、小6の頃にやっとジャズダンス教室に通い始めました。3年ほどたった頃、ジャズダンスをキレイに見せるにはバレエの基礎が大事だと気づき、バレエを習い始めたらすぐにのめり込んでしまいました。1年半ほどでコンクールに入賞したこともあり、海外でバレエを習いたいと思い始めました。その頃に映画の『愛と哀しみのボレロ』を見て、その振付に衝撃を受けました。ぜひこの作品の振付家である巨匠モーリス・ベジャールに習いたいと思っていたら、ダンス雑誌にモーリス・ベジャールのバレエ学校のオーディション情報を見つけて、「これは運命だ」と感じました。親もオーディションを受けることに反対しなかったため、スイスのローザンヌに行って受験したら、まさかの『合格』をしてしまい、高3の1学期で中退して9月から17歳で留学することになりました。

学校は日本とは違い多国籍の集まりで、生徒全員が「私を見ろ！俺を見ろ！」の世界です。振付が一緒でも表現の仕方は全然違ってきます。そこで、「自分はこうだ」とより主張をするようになりまし。元来、僕は自分がいいと思ったなら良くも悪くも人の話を聞かずに自分の理想に突き進むタイプでしたので、めげることはなかったですね。

バレエ学校を卒業後は、オーストリアのグラーツにあるオペラハウスに在籍し、ミュージカルに出演する機会を得ました。ミュージカルは「歌・踊り・芝居」がひとつの作品にすべて盛り込まれているところがとても素晴らしいと感じ、こんな楽しいものがあるならミュージカルをやりたいと思いました。

オペラハウスを退団したあとはローザンヌへ研修生として戻っていましたが、劇団四季のオーディションに合格し



たため、帰国して20歳で劇団四季に入りました。

その後、22歳で劇団四季を一度退団し、新潟のダンスカンパニーでもう一度ダンスに向き合いしっかりと実力を蓄えて、24歳で劇団四季に戻り、中学の時に「キャッツ」を見て憧れていた花形である黒猫の「ミストフェリーズ」を演じることができました。

僕は高校を中退して海外に行ってから、ずっと都内に住んでいました。ただ、4年前に新型コロナウイルスの流行で緊急事態宣言が出て公演中止が相次いだことから、自分の方向性などをリセットしようと平塚に帰ってきました。

街を歩き、飲みに行ったりいろいろな人と出会ったりして、『ああ！こんなにいい街なんだな』と再認識したんです。良くも悪くも派手過ぎず、落ち着いていて、住んでいても居心地がいいし、気さくに話することができる人の良さもあります。

そこから、地元平塚に自分が貢献できる活動や自分のいままでの経験、ノウハウや考え方などを提供していきたいと思い始めました。舞台を目指している子供たちやエンタメ



今年5/31・6/1にワークショップ開催

の仕事に興味ある若い人たち、スタッフ・裏方の仕事を指す人たちにワークショップだけではなく、もっと何か情報を提供できる場を増やしていきたいと考えています。そのためには、ひらしん平塚文化芸術ホールをもっと有効活用しなければいけないと思います。

同時に、声がかかればキャスト・パフォーマーとしてできる限り出演したいと思っています。今年は7月から11月まで、東京・大阪で上演されるミュージカル『ピリー・エリオット』に出演しています。

最終的には、年齢や身体のことと考えて、指導やプロデュース、制作をする側に立ちたい、そういう場所を作りたいという気持ちも芽生えています。自分が立ち上げたLGO projectは立ち上げ1年目で3月には高円寺、9月には恵比寿の劇場にて公演を二本上演しました。

今年はミュージカルの本番が11月末までありますが来年には新作の公演も発表したいと思っています。それを平塚から発信し、都内などに公演を拡げられるようにしたいです。自分一人の力だけでは難しいこともありますので、行政や地元の企業、スポンサーなどに力添えをお願いし、自分のやりたいことに共感して応援していただき、大きくしていきたいと考えています。

【プロフィール】永野 亮比己

平塚市出身。『LGO project』主宰/代表。17歳で渡欧し、巨匠モーリス・ベジャール氏に師事。20歳で帰国後、劇団四季入団。「キャッツ」をはじめとして、数多くの作品に出演。退団後も「ウエストサイド物語」「東京ラブストーリー」などのミュージカルに出演。ひらしん平塚文化芸術ホールでは、ワークショップやオープンライブに出演し、平塚の文化振興にも注力している。7月よりミュージカル「ピリー・エリオット」に出演し、好評を博している。



巡って学ぶ平塚学入門 ⑪

「古代東海道駅路跡」

生活に欠かせない道路。特に高速道路は日本各地の主要な都市と都市とを結び、人の移動だけではなくて物流においても大事なものです。そんな高速道路、今から1000年以上前の奈良・平安時代でもありました。もっとも、今のように自動車はありません。当時陸上で最速の移動手段は馬。人の移動のみならず、その人が持っている情報や書簡などの素早い伝達のためにもこの馬を使った移動はかなり重要。というわけで、都から各地方都市をつないでいく道を整備していたのです。馬を乗りついで移動していくこの道を「駅路」といいます。当時は畿内以外の地方は「〇〇道」と呼ばれ、今の平塚市のある神奈川県的大部分は「相模国」とされており、相模国は「東海道」に属していました。

この古代の道路は、平塚市内の発掘調査でいく

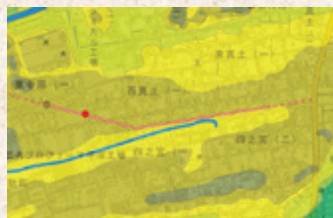


地面に彩色された緑と赤で、みつかった道路を原寸大で再現している。緑は通行した道路面で赤は道を区画する溝。真ん中の溝は中世期に構築されたものと思われる。

つかみつかっています。平塚市は相模国の行政の中心地である「相模国府」があったとみられ、発見された大きな道は駅路ではないかと判断されています。さて、大抵の調査はその後埋め戻され、「発掘調査報告書」という本にまとめられて終わるのですが、時には公園になったり案内板が設置されるものもあります。市内東中原にあるスーパーには、発見された古代東海道駅路跡の案内板と地面には実際の道路状遺構の検出状況の再現があります。道路状遺構の幅は約10m。周辺の他の調査でも同様の大きさの道幅を持つものがあり、全国的に見ても同規模のものが多いです。

調査状況から市内の古代東海道駅路は、国府のあった四之宮地区から西側の東中原へ向かってまっすぐ伸びた後、このスーパー周辺からやや北側に振れるようにつくられていたことがわかっています。そこから先はまだ調査で発見できていないので、どのようなルートをとるのかは未だ不明です。

(平塚市博物館学芸員)



調査で発見された道路状遺構から推定される駅路のルート(赤線)と取り上げた案内板の位置(赤丸) (国土地理院地図「淡色地図」に加筆し作成)

ひらしん平塚文化芸術ホール 主催事業レポート Vol.5

ひらしん平塚文化芸術ホールで実施している、様々なジャンルの事業の様子をお届けする主催事業レポート。今回は、「THE PROMENADEシリーズ」から、令和6年6月23日に開催した「石田組結成10周年ツアー 平塚公演」をご紹介します。

このシリーズでは、ジャンルにこだわらず、子どもから大人まで誰もが親しみやすい曲や音楽を演奏するコンサートを開催しています。これまでに「0歳から参加できるクラシックコンサート」や「映画音楽コンサート」、動物たちの演奏が大人気の「ズーラシアンブラス」を開催し、多くの方に音楽芸術をお楽しみいただいています。

今回は、神奈川フィルハーモニー管弦楽団の首席ソロ・コンサートマスターとしても活躍されている、石田泰尚さんが率いる弦楽合奏団「石田組」の結成10周年ツアーの平塚公演を開催しました。

ソロヴァイオリンの石田さんをはじめとした、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバスの弦楽10人編成での演奏は、弦楽器だけで編成されているとは思えないダイナミックなハーモニーでホールを包み込みました。クラシック音楽から映画音楽、ロックバンド「クイーン」の名曲まで幅広いレパートリーでの演奏と個性的なトークで盛り上がった満員の客席からは、自然とスタンディングオベーションが起こりました。

終演後のアンケートでも、「少人数編成なのに迫力がすごかった。」「素晴らしかったです。また平塚に来てください。」といった声があるなど大好評でした。今後もこのシリーズでは、誰もが楽しめる音楽のコンサートをお届けしますので楽しみにしてください。



リトアニアに行く前に… リトアニアの「歌と踊りの祭典」

平塚市は2023年11月25日にカウナス市と姉妹都市提携を結び、姉妹都市となりました。今回はカウナス市出身のジュギーテ・サウレさん（平塚市国際交流員）がリトアニアの「歌と踊りの祭典」について紹介します。

「歌と踊りの祭典」はリトアニアを始めとして、ラトビアとエストニアでも開催されています。2008年にはバルト三国の「歌と踊りの祭典」がUNESCO無形文化遺産に登録されました。

ソ連から独立する願望を持っていたバルト三国の国民は、1980年代から始まったデモ行進などを行う際に「歌う」ことで自分たちのアイデンティティーや意思を表現し続ける「歌う革命」という社会運動をすすめ、独立を勝ち取ることができました。このこともあり、独立後もこの慣習が残っています。



100周年記念祭典の様子



100周年記念祭典の様子

ロシア帝国占領下のリトアニアでは、母国語であるリトアニア語が禁止されていたこともあって、リトアニア語で歌うことはできませんでしたが、ロシア革命下の1918年にリトアニア共和国が独立宣言をしたことで可能になりました。そして、1924年にはリトアニアで初めて、1万人の観衆の前で3,500人のパフォーマーが歌と踊りを披露する「歌と踊りの祭典」がカウナス市内で開催されました。

それから4年に1度の祭典として一世紀にわたり受け継がれ、今年6月29日から7月6日の1週間にわたる開催が100周年記念祭典となりました。20ヶ国を超える外国在住のリトアニア人コミュニティも参加し、歌手やダンサーなどのパフォーマー37,000人がすてきな民俗衣装に身を包み、リトアニアの伝統的な歌や踊りを披露しました。あわせて、舞台・コンサートや芸術作品の展示なども行われ、リトアニア文化を多方面から紹介する大規模な祭典となりました。

ぜひ、この「歌と踊りの祭典」開催にあわせて、リトアニアに来ていただき、その歴史と共に“歌って踊る”リトアニア国民を肌で感じていただきたいと思います。



リトアニアで有名なカウナス工科大学のダンスチーム「Nemunas」(ネムナス)も祭典に参加

平塚市文化振興基金に御協力を

平塚市文化振興基金は、市民文化の振興を図るために活用されています。基金に御協力くださる方は、平塚市文化・交流課まで御一報ください。

発行 平塚市文化・交流課 | 〒254-8686 平塚市浅間町9-1

電話 0463-32-2235 FAX 0463-21-9756 E-mail : bunkoh@city.hiratsuka.kanagawa.jp

令和6年(2024年)10月15日発行 右の2次元コードより文化情報誌「たわわ」へアクセスできます

